ジェームス・クリュス『ネレ』における人形のモティーフ

漆　谷　球美子

はじめに

1986年、ジェームス・クリュス（James Krüss, 1926–1997）は、作家となる以前から構想を抱いていた作品群「101日物語シリーズ」（der Zyklus „Die Geschichten der 101 Tage“）[1]をようやく完成させた[2]。初めての児童文学作品『ロブスター岩礁の灯台』（*Der Leuchtturm auf den Hummerklippen*, 1956）[3]の出版から30年、シリーズの執筆に精力的に取り組み始めてからおおよそ8年の歳月が経過している。「101日物語」は、クリュスの代表作品を含めた全17作品によって構成されており、彼の集大成というべき作品群である。同シリーズでは、主人公となるボーイを登場させ、彼の「語り」を巡る人生を辿ることで、多彩な作品を1つの物語としてまとめることに成功している[4]。その他にも、枠物語の活用や、各作品が相互的に補完し合う円環構造といった、特殊な物語構造も確認できる[5]。このような「101日物語」の最後を飾る作品として、1986年、『ネレ 奇跡の子供』（*Nele oder Das Wunderkind*）[6]が出版された。

『ネレ』は、クリュスの代表作品の1つである『ティム・ターラー あるいは売られた笑い』（*Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*, 1962）[7]に続く、「悪魔との契約」の物語である。クリュスは、「101日物語」の締めくくりとして、再度「悪魔との契約」をテーマに選び、涙を流さない少女が、過度なストレスを抱える現代社会の中で、たくましく成長していく姿を描いて

いる。『ネレ』について、クリュスの友人でもあるドーデラ―は、「才能に恵まれ、魅惑的な世界へとさらわれた少女ネレの身の上に起こった、300 文字以上の物語の多くを、クリュスの人生の間接的な回顧録として考えることが出来よう」[8] と指摘しており、1960 年頃に、テレビ番組への出演などでも活躍した、クリュス自身の体験に基づいていることが窺える[9]。そして、ネレが巻き込まれることとなるショービジネスの世界は、クリュスにとって、多くの疑念と問題意識が生まれた場所であったことが推察される[10]。

本作品ではいくつか印象的な人形の場面が登場する。例えば、悪魔に連れられ世界的な歌手への道を歩むこととなる、本作の主人公ネレは、「彼の人形（seine Puppe）」（*Nele,* S. 97）、「ショーウィンドウのマネキン（eine Schaufensterpuppe）」（*Nele,* S. 152）などと表現されている。また、以前同じ悪魔に笑顔を奪われたティムが、人形遣いとなって再登場している。彼は、ボーイと共に、ネレに手を差し伸べる助言者となり、彼の上演する人形劇が、ネレと悪魔の契約において大きな転機をもたらすこととなる。本論文では、『ネレ』に描かれた「悪魔との契約」を再検証し、作品に描かれた「人形」の場面が、どのような意味を担っているのか、考察する。

1．ネレとリュフェットの「悪魔の契約」

「101 日物語」において、悪魔リュフェットが登場する作品は、5 作品ある。シリーズ順 に示すと、第 7 作品目『ティム』、第 8 作品目『ネレ』、第 9 作品目『ロブスター岩礁の友人 あるいは白い鳩の洞窟』（*Freunde von den Hummerklippen oder Die Höhle der weißen Taube,* 1983）[12]、第 10 作品目『パキート あるいは見知らぬ父親』（*Paquito oder Der fremde Vater,* 1978）[13]、そして第 11 作品目『ティム・ターラーの人形 あるいは売られた人間愛』（*Timm Thalers Puppen oder Die verkaufte Menschenliebe,* 1979）[14] となる。『ロブスター岩礁の友人 あるいは白い鳩の洞窟』をのぞく 4 作品では、リュフェットが子供たちに取引を持ち掛けるという点で共通している。実際に契約が成立した人物はティムとネレのみであり、残りの 2 作品におけるパ

キートとティムの息子クレショーは、契約を結ぶことはなかった。ここでは『ティム』と比較しながら、『ネレ』における契約の特性を指摘していく。

それでは、まずは両作品の契約内容を確認しておこう。『ティム』は、両親を失い、継母と義兄とともに暮らす少年ティムが主人公である。貧しく、家族との関係も上手くいかない孤独なティムは、亡き父との思い出の地でリュフェットに出会い、ティムの「お腹の底から湧き上がる、最後にはしゃっくりのつく笑い声」（*Timm*, S. 16）を取引しないか、と持ち掛けられる。リュフェットは、その代償として、「全ての賭けに勝つ能力」を授けることを提案する。以下の引用は、ティムとリュフェットが交わした契約である。

> 1. この契約はリュフェットとティムの間で結ばれるものとし、2. ティムが譲渡した笑いはリュフェットの任意で使用出来る。3. ティムはいかなる賭けにも勝つことが出来る力を譲り受ける。4. 両者はこの契約に関して他言してはいけない。5. 沈黙を破った者は、譲り受けた能力を失う。6. ティムが一度でも賭けに負けたら、リュフェットは笑いを返還する。しかしその場合はティムも賭けの力を失う。7. この契約はサインをした時から有効となる。（Vgl. *Timm*, S. 35f.）

ティムは、自身の決断によって、リュフェットと契約を結ぶことに同意する。ここでは、血による署名、特殊な取引対象、笑顔の喪失など、魔力の介入も確認出来る。ティムが契約によって手に入れた「全ての賭けに勝つ力」は、後に、リュフェットから笑顔を取り戻すための駆け引きの中で、役立つ能力となる。最終的に、ティムは仲間の助けを借りて、リュフェットから笑顔を取り戻すことに成功する。

続いて、『ネレ』における契約内容を確認しよう。同作品は、「可愛らしい口元にほっそりとしたあご、もじゃもじゃ頭で、青い目をした」（*Nele*, S. 11）、ハンブルクの学校に通う、普通の少女ネレが主人公となる。彼女は時折、叔母が経営する居酒屋で、友人らと共に、魅力的な歌声を披露する。

リュフェットは、ネレの歌声と彼女の泣くことのない性質に目を付け、音楽プロデューサーを介して、ネレの父親に、娘を歌手にする気はないかと、取引を持ち掛ける。以下、明らかになっているネレの契約内容である。

> 第19項　フロイライン・コルネリア・マグダレーナ・クヌープ（＝ネレ）は、契約期間中、決して泣かないことおよび一粒の涙を流さない義務を負う。
> 第20項　その対価として、ムジーフォン社並びに代表である社長は、上記条項の条件に従い、フロイライン・クヌープが国際的な歌手としてキャリアを積む手助けをし、契約期間中、彼女にその状態を維持する義務を負う。
> 第21項　契約期間および契約失効の可能性に関しては両者の了解の上で決定する。（*Nele*, S. 110f.）

ここでは、ネレはどのような状況に陥ったとしても泣かないこと、リュフェットは、世界的な歌手へと成長するまでネレをサポートすることが約束される。正式な契約書により契約が結ばれているが、その内容が明かされているのは、上記の3項目のみである。また、魔力による取引対象の喪失や血の署名がおこなわれることもない。ネレは、リュフェットの援助によって世界的なスターへと上り詰めるが、友情や家族愛、恋心といったネレを想う人々の愛に触れたことで、最後には涙を流し、契約から解放される。

これらの取引から、リュフェットが2人の子供に要求した対象は、笑顔や涙という人間らしい表情や感情であることが分かる。そしてリュフェットが人間に提示した対価は、富をもたらす可能性であると考えられる[15]。それは、ティムは「賭けに勝つこと」で得られる賞金の獲得、ネレは世界的な名声を獲得することで生まれる利益を指している。

両作品における契約内容は、いくつかの相違点も確認出来る。1点目は、取引対象の獲得方法である。ティムの場合、笑顔という表情そのものを取り

上げたため、取引後は、どんなにティムが望んでも、笑うこと自体が不可能となった。ティムが受け取った「賭けに勝つ力」も、その効力を即座に確認出来たため、両者は、その場で対象物を交換したことが分かる。対するネレは、涙を流すことを禁止されたに過ぎず、その能力や表情を取り上げられたわけではない。そのため、感情を揺さぶられた際に、涙を流さないようにコントロールすることは、ネレの努力にゆだねられている。彼女が受け取るべき対価も、将来に向けたサポートを約束されたに過ぎず、両者間の取引において、その場で対象物の交換がおこなわれたわけではない。

2点目は、契約を結んだ人物である。ティムの場合は、本人が取引相手となり、内容に納得したうえで、契約は成立した。ネレの場合は、彼女の父親が、秘密裏に契約を持ち掛けられている。契約の成立も、ネレの意思を確認することなく、両親によって済まされた。そのため、ネレ本人は、物語の中盤まで、自身が涙を流してはならないという義務を負っていることも知らず、リュフェットの正体にも気づいていなかった。

3点目は、悪魔リュフェットの立場である。『ティム』において、リュフェットは、自らを男爵（Baron）と名乗り、様々な業界で影響力を及ぼす、経済界の中核を担う人物であった。ティムは彼から、資本主義社会の仕組みや株取引、企業戦略など、経済活動の仕組みを学ぶ機会を得た。『ネレ』では、リュフェットは自らを社長（Präsident）と呼び、国際的な総合商社の経営者として紹介されている。どちらの作品においても、悪魔は人間社会に溶け込み、社会的地位を有した、莫大な資産と影響力のある人物となっている。しかし、ネレと取引をおこなう第二次世界大戦後の社会では、近代化が進み、魔力を使用することはほとんどない。そのため、リュフェットの人物像は、ティムの時代に比べ、より人間らしい振る舞いを身に着けた、ビジネスに精通した人物となっている[16]。

最後に、ティムとネレがリュフェットに近づく目的が挙げられる。物語の後半では、両者ともリュフェットに同行し、その経済活動の一部を担うこととなる。その理由は、ティムは失った笑顔を取り戻す機会を手にするためで

あり、ネレは歌手としての支援を継続してもらうため、つまり涙を流さない契約を守ることにつながっている。両者とも、笑顔や涙を常に意識しながら、リュフェット共に世界を巡っているが、一方は笑顔を浮かべるため、他方は涙を流さないよう努めるためと、その目的が相反している。

以上のように、『ティム』と『ネレ』における「悪魔との契約」を比較してきた。『ネレ』では、第二次世界大戦後の資本主義社会において、より人間らしい装いを身に着けた悪魔と、感情を解放することが困難となった人間の対決を見ることが出来よう。そして、その契約内容は、時代に即したビジネス的な取引へと移り変わり、大きな経済的効果を生み出すという目的へと置き換わっていることが確認出来る。

２．人形に示される子供らしさ

リュフェットが契約相手としてネレを選択した理由は、彼女が涙を流すことが出来ないことに起因する。それでは、なぜ、ネレは泣くことが出来ないのであろうか。この問いに対して、ネレは、両親の離婚がきっかけである、と述べている。その原因は、姑による嫌がらせ、それに伴う母親のアルコール依存、そして母から自立することの出来ない父親の態度、などにあった。4 歳のネレをめぐって争う両親を前に、彼女は、家族 3 人で暮らす穏やかな日々をあきらめ、子供らしく無邪気に振舞う機会を失ったのである。ネレはその時の複雑な心境を、悲しみと同情から、涙を流さなくてはならなかったが、実際に泣くことはなかったと振り返っている。それ以降、泣いたことはないと断言するネレであるが、同時に、笑うことも出来なくなっていることが、後に明らかにされる。すなわち、ネレにとって両親の離婚は、親から無償の愛情を注がれる機会と子供らしく過ごす時間を奪っただけでなく、泣くや笑うといった感情表現さえも失ったといえよう。

幼い頃から苦労してきたネレであるが、友人に囲まれ、両親とも良好な関係を維持しながら成長する。そんなネレが 11 歳になって出会った人物が、リュフェットであり、世界的な成功への道である。ネレの「まだ子供の声だ

が、少女にしては並外れて、豊かで澄んだ」（*Nele,* S. 16）歌声は、ボーイや友人をはじめ、悪魔リュフェット、音楽業界の関係者、そして多くの聴衆たちを魅了した。次の引用は、ネレが初舞台で歌唱する場面である。

> 聴衆はみな、ピアノ伴奏をしながら、とても表現力豊かな少女を前に、まるで魔法にかかったかのように、座っていた。私（＝ボーイ）は、その様子に気づいたとき、思わず鳥肌が立った。私たちは、ネレの横顔を、斜めに見上げていた。完全にネレの虜となった聴衆は、ネレが、拍子を変え、より力強い歌声でマーチのリズムを歌った時も、魅了された。（*Nele,* S. 40）

ネレの歌声は、「可愛らしい（süß）」「感じの良い（niedlich）」「魅力的だ（entzückend）」（*Nele,* S. 45）と、称賛を浴びた。この時、ネレが歌った曲が、「人形の歌シリーズ」である。人形のファッションショー、人形の子守歌、人形の結婚式といったこれらの曲は、音楽教師である父親の助けを借りながら、ネレが作詞作曲した「自身の人形のための歌」である。ネレに似合う、という理由で選曲されたこの歌は、小さな人形たちの幸せで楽しい一時を描いている。ネレが、大切な人形を思い浮かべながら、可愛らしく歌い上げる姿は、人々に感動を与え、彼女の歌手としての素質を十分に示す結果となった。

この「人形の歌シリーズ」は、『ネレ』の１日目第２章「人形とリハーサル」（Puppen und Proben）にて初めて披露されている。同章では、故郷であるハンブルクの街角で暮らすネレの日常が描かれている。次の引用は、ネレが友人と遊ぶ場面である。

> 屋根裏部屋の人形の家には、せり出した大きな２つの天窓から、太陽の光が降り注いでいた。それは、普通の家を小さくし、手前の壁を取り除いた家だ。この家は３階建てで、１番下の階にはキッチンとダイニング

ルーム、真ん中の階には両親の寝室と客間、そして最上階には子供部屋と遊技場があった。（…）客間には、人形の男女が１人ずつ座っている。ネレはこの２人にオルガとオスカーと名前を付け、リッシーは、２人は必ず結婚するはずだ、と主張している。２人の少女は、午後の時間はずっと、この人形の家で過ごそうと決めていた。そのため、彼女たちは、人形のカップルを、人形の家の前に停まっている馬車の中に座らせた。そして、２人ずつペアにした人形を、馬車の後ろに並べた。すると、美しい結婚式の行列が出来上がった。まだ音楽が足りなかったので、ネレとリッシーは歌うことにした。だが、彼女たちは、何を歌うべきなのか、まだ決めていなかった。（*Nele*, S. 26f.）

ここでは、ネレと友人のリッシーが、想像力を駆使して、人形のために結婚式を取り仕切る様子が描かれている。この人形の家は、隣人である老ヴォルタースが制作したドールハウスを指しており、ネレが最も気に入っている遊び場であった。先述した「人形の歌シリーズ」は、ここでの時間を基に創作されたと考えられる。世間の期待も高まる中、この人形の家は、ネレにとって、子供らしく、自由に過ごすことが出来る大切な場所であることが示されている。

ここまで、「人形の歌」と「人形の家」という、２つの人形を確認してきた。ネレにとって、「人形の家」で遊ぶことが、自分らしく過ごせる時間だったからこそ、その楽しみを表現した「人形の歌」は、聴衆の目に可愛らしく、感じよく映り、評価された。ネレにとって人形は、友人らと楽しい時を共有することが出来る玩具であり、自身の想像性を映し出す対象であり、どんな時にも少女に戻れる場所、子供らしい振る舞いが許される場所であったと言えるだろう。

しかしながら、歌手活動を促進したい大人は、子供であるネレの願いを聞き流し、仕事を優先させる。その結果、ネレは人形の家で、ある事件を引き起こす。

> 目の前に現れた光景は、私（＝ボーイ）を恐怖に陥れた。人形の家の住人たち、長い裾のドレスを着た婦人たちと黒の上着に黄色いベストを着た紳士たちが、手足をいろいろな方向へ無理やり捻じ曲げられ、螺旋階段の上階で、明らかに怒り任せに投げ捨てられたまま、放置されていた。それを目にした私は、思わず小さな悲鳴を上げてしまったのだが、全ての人形の首がなかった。胴体や首の切断面から、荒々しく素手で頭をもぎ取っていることが分かった。（*Nele*, S. 86）

ネレは突然、大切な人形の首をもぎ取ったのだ。それは、彼女が友人らと共に計画し、楽しみにしていた人形のフェスティバルを、レコードの作成という理由から、中止するように指示されたためであった。過去に一度、同じ理由から延期を余儀なくされたネレにとって、この決定は理解し難い話であった。楽しみにしていた時間を無理やり奪われたネレは、心の安定を失い、このような暴力的な行動をとったのであった。

ここでは、ネレを売り出すことに熱心な大人とそれに反抗するネレの対比が強く示されている。人形のフェスティバルという子供たちの大切なイベントは、大人にとっては些細な子供の遊びでしかない。歌手活動に携わる人々にとって、ネレを歌わせることが彼らの仕事であり、効果的に売り出すことの方が優先される。そして、子供のネレに対して、優先すべきは働くことである、という価値観を押し付けるのである。リュフェットとの契約の事実も知らないネレには、歌うように強制されることは、大人の身勝手でしかない。彼女にとって、人形遊びに示されている、友人らと共に無邪気に遊ぶことの方が、何よりも大切な時間である。しかしながら、子供という立場では、大人に抗うことは難しい。本来ならば、ネレを守る立場にいる両親でさえ、契約や金銭問題により、娘を働かせなければならない状況に追い込まれており、彼女を積極的に擁護することが出来なかった。大人への憤りと友人らに対する罪悪感から、ネレの心は、次第に追い詰められていったのだ。

大切な人形を破壊したネレの行動は、子供らしくいることの放棄を表していると考えられる。彼女を心配する人々の働きにより、人形のフェスティバルの延期は回避され、予定通りおこなわれる運びとなる。しかし、この事件を境に、ネレが遊ぶ姿が描かれることはなく、さらには、通学や地元での生活にも制限が設けられるようになった。それは、ネレ自身が、仕事を優先する生活を受け入れたことを意味している。ネレは、幼年期に、両親の離婚によって、家族の中で子供らしく過ごすかけがえのない時間を奪われた。そして今度は、歌手活動を積極的に推し進める大人たちによって、子供らしく遊ぶ時間や穏やかな生活を、再び奪われたのである。子供らしさを象徴する人形を、ネレ自身が暴力的に破壊することは、大人からの期待と責任を押し付けられた少女が、自らの手で子供時代に幕を引かざるを得ない孤独を示していると考えられる。

３．２つのピュグマリオーン伝説

１日目第２章「人形とリハーサル」と対を形成する章として、７日目 20 章「オーディションと人形」（ Proben und Puppen ）が存在する[17]。ここでも、ある象徴的な人形が登場している。それは、有名なギリシア神話「ピュグマリオーン伝説」である。自らの手で、理想とする女性を彫刻した、キュプロス島の王ピュグマリオーンは、ガラテアと名付けた美しい象牙像に恋い焦がれる。日に日に衰弱していく王を哀れに思った女神アフロディーテによって、ガラテアは命を与えられ、王は彼女を妃として迎える物語である[18]。同章では、形を変えた２つの「ピュグマリオーン伝説」が確認できる。それは、舞台『マイ・フェア・レディ』のオーディションと、ティムが上演する「氷の女王」の人形劇である。

ジョージ・バーナード・ショー（ George Bernard Shaw, 1856–1950 ）によって再話された戯曲『マイ・フェア・レディ』は、時を経て、世界的にも有名なミュージカルへと変化を遂げた。『ネレ』では、舞台をドイツに置き換え、ハンブルクの田舎娘が、上流階級の女性へと変化を遂げる物語となっ

ている。ここでは、主演女優イライザ役のオーディションに、ネレが立ち会う姿が描かれる。ネレ自身は、年齢を理由に、オーディションに参加する資格を得られなかったが、候補者たちの前で模範演技をおこなう役目をこなした。この『マイ・フェア・レディ』の物語は、「ネレの物語」と重なる部分が多い。ハンブルクの普通の少女であったネレが、金銭的な援助者によって、ドイツ、ヨーロッパ、そして世界で認められる歌手へと成長していく姿は、まさに、下町生まれの花売り娘イライザが、ヒギンズ教授によって、社交界でも通用するレディーに仕立て上げられる物語を模していると言えるだろう。イライザは、訛りの矯正と標準英語の習得を目指したが、ネレは、英語をはじめとするヨーロッパ言語の習得へ積極的に取り組んでおり、両者が言語の獲得を目指すという点でも類似している。ネレの歌手への道は、リュフェットらによる作為的な計画であることが示されているが、ネレ自身は、成功を夢見て努力を重ねていることから、その熱意に偽りはないと言えるだろう。

イライザに手を差し伸べたヒギンズ教授のように、本作品において、ネレを世界的な歌姫と導く人物は、リュフェットである。このことから、この物語は、悪魔が理想とする人間を育成する物語と捉えることも可能である。「101 日物語」におけるリュフェットの存在は、経済活動における悪魔的側面、そして富の誘惑に負ける人間の弱さを映し出している。『ネレ』でも、子供が働き大人が浪費するという、両者の立場が逆転した奇妙な状況が描かれている。ネレをサポートする人々もまた、少女が働くことに疑問を抱く者はいない。彼らは、その魅力的な歌声で人々に感動を届けるという、通俗的な目的を掲げ、より高い利益を生み出すために彼女を利用する。このように、リュフェットやその周りの大人は、高い経済効果を生み出す人材として、ネレを捉えていると考えられる。

また、涙を禁ずる条件から分かるように、リュフェットは、ネレに感情的な振る舞いを禁じている。『ティム』において、リュフェットは、笑顔の契約の他にも、クレシミールという少年から「人のよさそうな目」を取引して

おり、魅力的な身体的特徴をもつ子供を選別し、奪っていることが確認出来る。ここでは、悪魔は、人間の表情を奪い、自ら身に着けることで、好印象を与える人間になろうと画策していた。しかし満足のいく結果を得られなかったことで、ネレに対しては涙を禁じ、自身と同じ表情を持たない人間として、そばに置こうと考える。このことから、リュフェットが、自身には理解することのない人間らしい感情を執拗に追い求め、羨望と憎悪を抱いていることが分かる。

このように、リュフェットは、ネレに、大きな経済効果を生む歌姫となること、感情を所有していない人間であることを望んでいた。それは、リュフェットが理想とする人間像を指しており、自らの手で自身の思いのままに操ることが出来る便利な人形として、ネレを育てていたといえるだろう。

もう１つの「ピュグマリオーン伝説」である人形劇「氷の女王」では、涙を巡る取引における１つの考えが提示されている。この人形劇は、氷に包まれた国の王と氷の彫刻から作られた王妃の物語である。王妃は、涙を流さなければ、永遠の若さと美しさを約束されていた。ここでは、王と王妃の涙を巡る意見の対立、そして、彼らが治める人間社会に対する態度の相違が示されている。両者は、偶然居合わせた客人に対し、どちらの考えが正しいか問うも、彼は、実際にその目で世界を見るよう２人に進言する。次の引用は、目の前に広がる光景に驚く王妃の姿である。

客人：
あなたのご想像の通りです、陛下、王妃は泣いておられます
つらい義務と過酷な重圧から解かれ
彼女は温かな慈悲の涙を流しておられます
人々の苦しみが彼女の涙を押し出しました
なぜなら、人間は動物に比べ、多くの涙を流すためです
そして、人間と動物を分けるもの
それは、悩み苦しむ時に、涙を流せることでしょう（*Nele*, S. 324）

そこには、飢える人々、寒さに凍える子供たち、そして争いが絶えない世界が広がっていた。人々の苦しみを目の当たりにした王妃は、悲しみから惻隠の涙を流す。そして、彼女の涙は、氷で閉ざされた世界を溶かし、暖かな光と緑溢れる景色へと再生させる。王妃は、貧しく悲惨な運命を背負った人間を憂い、涙を流すことが出来た。そして、この人形劇が示すように、ネレもまた、彼女を心から心配する家族や友人、少年らの恋心といった、他者の想いに触れることで、自然と涙を取り戻すことが可能となる。ここでは、他者への優しさが涙を誘発し、涙によって結びつく人々の絆や笑顔によって広がる心の繋がりこそが、人間らしさであるという、富と人間らしさを巡る契約における、1つの答えを提示しているといえよう。

「氷の女王」の人形劇は、ネレに自身の状況を客観的に示し、彼女の心を揺さぶった。それは、後に続く心温まる様々なサプライズの効果を高め、涙を流すきっかけを生み出した。このことから、この人形劇は、ネレを契約から解放する一因となったといえるだろう[19]。その後のネレは、涙だけでなく、忘れていた笑顔も自然と浮かべることが出来るようになる。彼女は、無くしていた子供時代を取り戻すかのように、心の赴くまま、生きる楽しさを実感するようになる。また、『マイ・フェア・レディ』のオーディションは、ネレ自身の夢である、女優へのあこがれを再認識する場となった。すなわち、これら2つの作品は、リュフェットが導いた歌手という人生が終幕し、ネレ自身の望んだ新たな夢への出発を意味するものであると指摘できる。

このように、同章に示された人形は、「ピュグマリオーン伝説」、すなわち、理想を投影した人形を指していると考えられる。それはリュフェットにとってのネレであり、ネレにとっては様々な制約から解放され、涙を流すことが出来るようになった自分自身、そして理想を掲げ、迷いながらも進んでいく未来の自分自身を指しているといえるだろう。

おわりに

本論文では、『ネレ』に登場する人形の場面を考察してきた。物語前半では、人形の歌や人形の家という、子供らしさを象徴する人形が描かれ、ネレにとって心の拠り所であることが示された。物語後半では、「ピュグマリオーン伝説」に準えた理想の人間像が描かれている。それは、ネレにとって、涙を流せるようになり、自由を手にした自分自身を指していると考えられる。本作品において人形は、様々な制約に縛られたネレの心を映し出す対象として描かれているといえるだろう。

ネレは、喜びや悲しみといった感情を持ち得ながら、それを解放する術を知らない。そのため、感情を制御することが難しく、他者からの影響を受けやすい、危うさも兼ねた子供として描かれている。リュフェットが惑わす富への執着や世間からの賞賛、莫大な報酬など、彼女を取り巻く環境は、有名になるにつれ、誘惑との闘いへと変わっていく。クリュスは、感情を抑え、理不尽な要求に答え続けなければならないネレの姿を、自身が出会った子供たちに重ねていると考えられる。過激さを増していく消費社会の中で、最後には涙を流すことが出来たネレのように、生きていくうえで真の豊かさとは何なのか、読者となる子供たちに示しているといえるだろう。

テクスト

James *Krüss: Nele oder Das Wunderkind. Die Geschichte vom verbotenen Weinen. Vom dreiundvierzigsten bis zum neunundvierzigsten Tag erzählt von James Krüss und mit Bildern versehen von Rolf Rettich.* Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1987.
(= Die Geschichten der 101 Tage, Bd.8 / Ravensburger Taschenbuch; Bd. 1568)
同書を『ネレ』と記す。本書からの引用は、本文中に *Nele* と略記し、ページ数を付けることとする。日本語訳については、森川弘子訳 『涙を売られた少女』 未知谷 2006 年 を参照したが、本文中の訳は筆者がおこなった。なお固有名詞は、森川訳に倣った。

James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen. Vom sechsunddreißigsten bis zum zweiundvierzigsten Tag erzählt von James Krüss und mit Bildern versehen von Rolf Rettich.* Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1987.
(= Die Geschichten der 101 Tage, Bd.7 / Ravensburger Taschenbuch; Bd. 1567)
同書を『ティム』と記す。本書からの引用は、本文中に *Timm* と略記し、ページ数を記す。日本語訳については、森川弘子訳 『笑顔を売った少年』 未知谷 2004 年を参照したが、本文中の訳は筆者がおこなった。なお固有名詞は、森川訳に倣った。

注

1 James Krüss: *Die Geschichten der 101 Tage. Mit Bildern vers. Von Rolf Rettich. (In 17 Bdn.)* Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1986–1989. (Ravensburger Taschenbuch; Bd. 1561–1577)
以下、「101 日物語」と記す。
「101 日物語」は、そのタイトルから分かるように、101 日の物語を語る日々が描かれているが、その日付は連続しているわけではない。例外もあるが、基本的に作品ごとに 7 日間を有しており、『ネレ』は 8 作目、43 日目から 49 日目を占めている。『ロブスター岩礁の灯台』のように、7 日間にわたる語り合いの日々が描かれることもあれば、『ネレ』のように、数年に及ぶ冒険談を、7 日間に区切って語る場合もあり、その状況は作品により異なる。

2 Vgl.: James Krüss: *Naivität und Kunstverstand. Gedanken zur Kinderliteratur.* Weinheim und Basel: Beltz Verlag, 1992, S. 218.
以下、本書からの引用は、*Naivität* と略記し、ページ数を記す。

3 初版 James Krüss: *Der Leuchtturm auf den Hummerklippen.* Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger, 1956.

4 ボーイは、出生や家族構成、滞在先など多くの点で類似していることから、クリュス自身をモデルとした人物であると考えられる。このような見解は、多くの研究者も指摘している。Vgl.: Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger.* Hamburg: Carlsen Verlag, 2009. あるいは、Vgl.: Kerstin Ott: *Die Utopie der Glücklichen Inseln. Wandlungen und Konstanten im Werk von James Krüss.* Frankfurt am Main Phil. Diss. 1993. などが挙げられる。

5 「101 日物語」の円環構造の詳細について、クリュス自身が解説を行っている。Vgl.: James Krüss: Zur graphischen Darstellung des Zyklus „Die Geschichten der 101 Tage.“ In: *Sechs Jahrzehnte oder Vom kleinen Boy zum großen Boy. James Krüss zum 60. Geburtstag.* Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger, 1986, S. 46f.,
Vgl.: *Naivität*, S. 218–224.
「101 日物語」の物語構造に関する先行研究として、Ada Bieber: *Zyklisches*

Erzählen in James Krüss'Die Geschichten der 101 *Tage*. Hamburg: Igel Verlag Literatur & Wissenschaft, 2012. が挙げられる。

6 初版 James Krüss: *Nele oder Das Wunderkind*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger, 1986.

7 初版 James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger, 1962.

8 Klaus Doderer: a.a.O., S. 36.

9 クリュスは、ミュンヘンにて作家として成功を収め、しばらくこの地で暮らしていた。その際、テレビ番組への出演や作品の映像化など、メディアと関わる様々な仕事に携わる機会を得た。Vgl.: Ebenda, S. 36, 132.
（映像資料）Vgl.: James'Tierleben. －3 Folgen－ Von und mit James Krüss. Mit Suzanne Doucet und Hans Clarin. hr media, 1965.

10 Vgl.: *Naivität,* S. 224.

11 「101 日物語」に属する作品は、出版順とシリーズ順が異なる。作品の中には、出版年以外にも、タイトルや内容の差異がみられることもある。

12 初版は、1983 年に出版されている。
101 日版 James Krüss: *Freunde von den Hummerklippen oder Die Höhle der weißen Taube*. Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1987.

13 初版は、1978 年に出版されている。
101 日版　James Krüss: *Paquito oder Der fremde Vater*. Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1987.

14 初版は、1979 年に出版されている。
101 日版 James Krüss: *Timm Thalers Puppen oder Die verkaufte Menschenliebe*. Ravensburg: Otto Maier Verlag, 1988.

15 取引に応じた子供たちが、富の獲得を目的にしていたとは考えにくい。あくまで、リュフェット側の目論見として、莫大な富を生み出す力を提示したと考えられる。

16 『ティム』では 1930 年代、『ネレ』では 1956 年以降が舞台となっている。

17 「101 日物語」に属する『ネレ』もまた、7 日間の日付による章立てが確認出来る。同作品では、各日 3 章を形成しており、全 7 日間２１章となる。加えて、プロローグとエピローグが枠物語を形成しており、「101 日物語」としての繋がりを保っている。さらに、『ネレ』には、4 日目 11 章を中心に、蝶番のように、各章が対を形成しているという、特別な物語構造も確認出来る。このことに関しては、今後の研究対象としたい。 Vgl.: *Nele*, S. 171f.

18 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 2012 年 206 ページ および、呉茂一『ギリシア神話』新潮社 2013 年 207 ページを参照した。

19 『ティム』においても、人形劇は大きな転機となっている。それは、友人のリッケルト夫人に連れられ、「金のガチョウ」の人形劇を見る場面にある。笑顔を浮かべることのない姫が、ガチョウにくっついて離れることの出来ない滑稽な行列を見

て、心の底から笑うこの物語は、笑顔を失ったティムにとって、リュフェットへの憎しみを増幅させ、必ず笑顔を取り戻すと強く決意するきっかけとなった。これらのことから、「101 日物語」における「悪魔との契約」の物語において、人形劇の鑑賞は、子供たちに新たな思いを抱かせるきっかけとなっているといえよう。Vgl.: *Timm*, S. 71–79.